



君津商工会議所 FAX通信

会員の皆様へ…会頭からのメッセージ
平成28年3月25日(金)

Vol. 324

初春の南房絵を一回りして見たもの
～報告 3/21(月)～

秋元 秀夫

彼岸の日曜日は雨でしたので翌日、圏央道鶴舞インターから大多喜七曲り坂を下って先ず大原へ向かいました。

久しぶりに通るロードサイドの十万石のドライブインはドアが閉まり暗かった。先々週あたりテレビが大原漁港の魚料理店を大々的に放映していたので、探したが見当たらず。辺りに聞く人も無く、もう一回りして諦めて提灯屋藤江本家へ寄って家紋入りの盆提灯を2張り注文する。藤江本家は今から凡そ30年前、私が坂田の自治会長をした3年間で30数回の放火があり「夜廻り」する役員たちの名入提灯を作ってからで、今は息子が後を継いで居る。家業を守って来たら今では提灯を作るところも無くなってしまいましたと「油乾し」の祭り提灯が店内にいっぱいでした。

私が海から陸へ転業する時、「商いには必ず不況があるがその時は迷わず本業に徹して勉強努力すれば生き残れる」と教えてくれた人を思い出しておりました。大原を出て御宿の商店街をゆっくり走り抜けて、部原で左折して川津港へ海沿いの細い道を走ると官軍塚を過ぎる辺りから直角に数十メートル以上切り立った絶壁に太平洋からの巨浪がぶつかり、白龍が天に駆け上がる様な波しぶきは船首に立って荒波を潜り抜ける壮観がありました。川津港を左下に見て更に崖に沿って曲りくねった細い道を抜けると、目の前に広々とした勝浦港が広がっていました。勝浦は港も市場もまちも人も自信に満ちた風格があり、人の動きが違いました。私の少し友人の経験才覚を持った猿田市長を勝浦市は良き時良き人を得たの

ではという思いがあります。

昼食は久しぶりに鴨川笹元でと車を降りると何処で見ていたのかおかみさんが飛び出してきて「5月に窯出しするから見て下さい」と。この店は加藤登紀子、大串大慈、杉山春信らよく集まり、主人は絵を画き、奥さんは焼き物を作る。30年来彼女の名作は私が収蔵しております。三芳村正林寺は片手で礼拝して「三芳土のめぐみ館」へ着くと青物は既に売り切れて、亡き妻にキンセンカを買い、握りこぶし大2ヶ入り千円の筍を2袋土産に買う。三芳から平群の山合いを通過して岩井に出て勝山の漁港通り商店街をゆっくり抜けてお目当ての「道の駅保田小」へ着いたのは3時頃でしたが、広い駐車場は満車でしたがうまく潜り込めた入口に近い白い建物は「市場」どうやら元体育館らしいが、「道の駅」にしてはおしゃれなセンスの良いレイアウト。高級スーパー並みでした。しかしよく見ると台座は体操の跳び箱、小さな椅子、ランドセル、学帽等様々な学校用具が巧みに取り込んであり、見つけるたびにニコッと笑いがこぼれました。校舎は食べ物エリアでしたが良くわかりませんでした。金谷の「岬の茶屋」はぼろ小屋が白い洋風な建物に変わりましたが、小さな店はいっぱいでした。夕食は君津の魚料理の店に入ると親父さんが「私も料理仲間夫婦で保田小へ行ってきました。行く途中の話題はたかが道の駅の料理だから安くても大したもの食わせないだろうと皆先入観を持っていましたが、食べ始めたら皆表情が変わって、こりゃうまい！おいしい！！あら凄いわ！と大喜びでした」と、道の駅、直売所がたくさんでき、新鮮な海産物や野菜が大好評です。今回はその周辺に食べ物屋が隣接し、大型バスの駐車場も増設されていました。御宿7200人、勝浦19000人、勝山8000人の商店街は店が明るく開かれ、生き生きとした気力を感じました。小さな町もいいもんだなあと妙な気持でした。

追伸：2日程前、町の料理店でイギリス人2人の客と出逢い、ブローケンイングリッシュで話したら「食なび」を見て来たがメニューが全く分からない…と言われました。次は一工夫を…。